

すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2021.8

223号

■特集／三重県指定伝統工芸品

●いま、グループネット／鴨神社 氏子総代会 ●みえを歩こう／伊勢市 ロマンの森 伊勢三郷山



三重県指定伝統工芸品

取材・文：中村真由美 中村元美 堀口裕世
 撮影：……梅川紀彦 尾之内孝昭 中村元美
 ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



江戸時代後期に深野和紙を用いて出された紀州藩の「松坂銀札」(復刻)。
 松坂の豪商らが請け負って銀銭などと交換されました。

自然の素材と職人の技が作り出す暮らしの道具——。
 今では伝統工芸品、民芸品などと呼ばれるようになったそれらの品は、昔は人の暮らしに欠かせないものでした。世の中の変化に追われるように、見かけることが少なくなりましたが、温かみのある、用の美に満ち、使い勝手にも優れています。

それぞれの工芸品がその地で作られたのには、風土や暮らしとの深い関わりがありました。長い年月の中で技が研かれ、その土地の気候や文化にしっかりと合う道具が作られていったのです。

三重県には、豊かな自然と文化や歴史の中で育まれた伝統工芸品が、今もたくさん息づいています。伝統を担う人たちが、その地で代々受け継いできた製法で、心を込めて作られているのです。
 今回は、三重県指定工芸品の中から6つの品をご紹介します。大切に、けれどしっかりと使い込んで、長いおつきあいをしたくなる道具たちです。

●各施設の営業日時・料金・予約方法などは、それぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。

◆三重県指定伝統工芸品

名称	地域
桑名盆(かぶら盆)	桑名市
桑名刃物	桑名市
桑名萬古焼	桑名市
桑名鋳物	桑名市
多度の弾き猿	桑名市
和太鼓	いなべ市、桑名市
地張り提灯	いなべ市
日永うちわ	四日市市
四日市の提灯	四日市市
関の桶	亀山市
高田仏壇	津市
阿漕焼	津市
伊勢木綿	津市
なすび団扇	津市
竹細工	津市
深野紙	松阪市
松阪萬古焼	松阪市
松阪の猿はじき	松阪市
松阪木綿	明和町、松阪市
伊勢の神殿	伊勢市
伊勢の提灯	伊勢市
伊勢玩具	伊勢市
伊勢の根付	伊勢市、志摩市、津市、明和町、玉城町
伊勢春慶	伊勢市
伊勢紙	伊勢市
伊勢一刀彫	伊勢市
和釘	伊勢市
擬革紙	玉城町、明和町
火縄	名張市
尾鷲わっぱ	尾鷲市
那智黒石	熊野市
熊野花火	熊野市
市木木綿	御浜町

資料提供：三重県 雇用経済部 三重県営業本部担当課
 伝統産業・地域資源活用班

取材・撮影は4月中旬～5月中旬に行いました

関の桶

【亀山市関町】



カンナでガワを削る服部 健さん

東海道47番目の宿場町・関宿には、道行く人が足を止めて、宥越しに内部をのぞく店があります。明治15（1882）年創業の「桶重」です。店内に入ると、最初に目に付いたのが花手桶。飴色の木肌と大輪の赤いボタンが調和し、とても

風情があります。「その桶はサワラで、30年物だね」と教えてくれるのは、4代目の服部 健さんです。桶の主な材料には、サワラ・コウヤマキ・スギなどがありますが、花手桶に使用するのにはサワラが多いとのこと。加工しやすい上に、水に



花手桶にいけられたボタン



服部 健さん

強く匂いが少ないのが特徴です。そのため、イセビツ（置き蓋の飯櫃）や、ハンギリ（底の浅い盥状の桶）などにも使用されます。実際にサワラの木片に鼻を近づけると、ヒノキほどの強さはなく、ほのかに優しい香りがしました。また、耐久性に優れているコウヤマキは風呂桶などに、スギは味噌桶や漬物桶などに使用されます。

「関の桶」は50年経っても壊れないと評され、全国各地から注文が舞い込む服部さんには、職人としての信念がありま

す。中でも特にこだわっているのが、材料の厳選。たとえばサワラは、年輪の詰まった上質なものを、タガ（桶の外側を堅く締め固める輪）に使用する竹は5年物の真竹で、11月ごろに伐採したものという具合で、必ず自分の目で見極めるといいます。また、使用した道具は毎回手入れするというのも、職人ならではのこだわりでしょう。壁一面に並ぶカンナやセン（両手で使う削り道具）などは一見の価値がありますが、「一番古い道具は」と尋ねると、小さな板を見せてくれました。

型の桶や、直径2メートルを超える大型の桶も制作。また、部材がバラバラの100年物の桶を修理したこともあるといいます。「愛着があったみたいで、とても喜んでくれたね」と話す表情は、とても穏やかで、人柄が伝わります。

この和やかな笑顔の服部さんが、表情を一変させたのは、作業風景を見せてくれた時のこと。花手桶作りには30以上の工程があり、材料の切り出し、アーチ状に削ったガワの組み立てや削り、底板入れなどの工程を経て、下準備したタガをはめ込んで仕上げに入ります。

この和やかな笑顔の服部さんが、表情を一変させたのは、作業風景を見せてくれた時のこと。花手桶作りには30以上の工程があり、材料の切り出し、アーチ状に削ったガワの組み立てや削り、底板入れなどの工程を経て、下準備したタガをはめ込んで仕上げに入ります。

この日は、ガワを削る工程などを見せてもらいました。静寂の中、カンナを持つ服部さんの手がリズムカルに動くたびに、おがくずがこぼれ落ち、芳香を放ちます。一連の動作は、まるで服部さん自身が精巧な道具のようにも見えました。

関宿では、今日もまた、桶作りに真摯に取り組む職人の姿が見られることでしょう。

お問い合わせ

「桶重」
TEL 0595-96-2808

「どんな桶でも作るし、どんな桶でも修理するよ」と服部さん。その言葉通り、全国から寄せられる注文には必ず応え、これまでも神社の神事で使用する卵



「桶重」外観



カタ（上段右側）やカンナ（中段右側）などの道具類が整然と並ぶ。



リズムカルに動く服部さんの手

伝統を守り新風をおこす

日永うちわ

【四日市市日永】



「貼り」の工程を行う稲垣 和美さん



伊勢型紙を使用した「日永うちわ」

「日永うちわ」は、天保4(1833)年に成立した『勢陽五鈴遺響』の日永の項に「名産」と記されたほど、全国に知られた存在でした。東海道と伊勢街道の追分として賑った日永には、多くの店が軒を連ねていましたが、現在は「株式会社稲藤」1軒となり、4代目で取締役会長の稲垣 嘉英さんと、奥様で常務取締役の和美さんが伝統を守り続けています。「まちかど博物館」として公開し、状況に応じて手作り体験も受け付けている

すさを実感します。「日永うちわ」は、細く丸い竹をそのまま柄として使用しているため、手になじむのが特徴。扇ぐ風も心地よく、優雅な気分になりました。この柔らかな風は、1本の竹を細かく60本程度に割いて交互に袋状に編むことで生み出されます。そのため、加工が難しく高い技術を要しますが、このことが「香るうちわ」「虫よけうちわ」などの新商品制作を可能にしました。袋状のわずかな空間に香り玉を入れ、ラムネや

「日永うちわ」制作には20以上の工程がありますが、この日は、お二人に「貼り」と「断裁」の工程を見せてもらうことに。刷毛で骨全体に糊を塗り、和紙を貼り付ける和美さんの一連の動作はスムーズで、手際の良さに見とれてしまいました。傍らでは、嘉英さんが鎌と木槌を使って、余分な骨を断裁する際のコンコンという音が響きます。伝統を守りながらも新たな風を起す二人の挑戦は、5代目へと受け継がれていくことでしょう。

お問い合わせ

株式会社稲藤(水曜日定休)
TEL 059-345-1710

棚田と和牛の里の礎となった紙作り

深野紙

【松阪市飯南町】



冷たい水で紙を漉く※



どっしりとした和紙の束

かし、明治に入ると、機械化や洋紙の台頭に圧され、深野の漉屋は次々と廃業に至りました。

「最後の2軒が廃業したのが昭和44(1969)

美しい棚田と松阪牛発祥の地として知られる飯南町深野。この地で紙漉が行われるようになったのは、安土桃山時代の末ごろ。冷たくて鉄分の少ない清流に恵まれているなど、紙漉に適した環境であることを知った郷士の野呂市兵衛が、美濃から職人を招いたことに始まります。江戸時代には250を超える家々が紙に携わり、紀州藩の「松坂銀札」や松坂商人たちの帳簿、神宮のお札などさまざまな紙が漉かれていました。し

年でした。昭和58(1983)年に町史の編纂に付随して、父と私が紙漉を再現したのをきっかけに、4年後、「深野和紙保存会」が結成されました」と語るのは、同会の会長を務める野呂修三さん。「江戸時代には、『深野に行けば仕事がある』と各地から人が集まりました。紙漉は冬の作業ですから、夏は米を作るため、たくさんの



野呂 修三さん

棚田が開墾されたのです。また、和紙の需要が激減した昭和30年代、紙の原料を煮ていた釜でわらや麦を煮て牛に与えたため肉質が上がり、深野の牛の評価が高まりました」。棚田も和牛も、その基盤となったのは紙漉だったのです。

原料となる木を刈り取り、皮をむき、煮て水にさらし、石臼などで撞いて、水を張った舟で漉き……。寒い季節に水を使う紙漉は、体力も技術も精神力も要する厳しい仕事ですが、「紙漉の技や喜びを次世代に伝えたい」と野呂さん。現在「松阪市飯南和紙和牛センター」を拠点に17名が伝統の技を守り、地元の学校の卒業証書を生徒自身が漉くなどの活動が続いており、今秋開催予定の「三重とこわか国体」でも女子総合成績表彰状(第1位(皇后杯)から第8位)として使用されます。冬季には紙漉体験もできるそうです(要予約)。

お問い合わせ

松阪市飯南地域振興局
TEL 05998-32-2511

※印の写真は取材先から提供していただきました



稲垣 嘉英さん(右側)と和美さん

伊勢の提灯

【伊勢市船江】

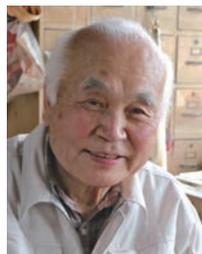


木型に巻いた竹ひごに、糸をかけて固定。提灯の強度も増す。

嘉永5(1852)年創業の「岩田提灯店」は伊勢神宮御用達。照明器具として生産された提灯は、祭礼場面や装飾での用途も多く、「伊勢の提灯」はおもに遷宮行事のときに大量に作られていました。

5代目となる岩田茂男さんは昭和16(1941)年生まれ。「うちの親父は三男でセールスを担当していましたが、長男が工場長、次男が絵や字を描いて、その時代は分業でね」。工場が戦災を受け

てからは岩田さんの父親が跡を継ぎ、岩田さんは22歳でこの仕事に就きました。



岩田 茂男さん



祭りの出番を待つ提灯。

えられません。丸と棗が基本で、ほとんど使わないひょうたん型とかもあります。特色のある提灯は文献などを調べながら作っています。まずはそれぞれの形に合わせて、木型を設計します。その木型に沿って竹ひごを螺旋状に巻いて形を作り、今度は竹ひごを繋ぐように、縦に糸を巻きつけて、しっかりと固定します。そして竹ひごに刷毛で糊を伸ばし、美濃和紙を一枚ずつ貼り合わせます。乾いてから折り畳む部分をヘラで1か所ずつ押しつけて印をつけ、油を塗って仕上げます。これらの作業はかつては分担していましたが、今は富子夫人と二人で全工程を担っています。



折り畳む部分をヘラで押す。
写真提供：伊勢文化舎



竹ひごの継ぎ目が短く、丁寧。



家紋の伊勢型紙は300種ほど



「神都博覧会」の提灯作り※

提灯の文字や紋様はすべて岩田さんによるものです。楷書や行書、隸書、勤享流など、いろんな書体や絵柄を描き分け、さまざまな注文に応じてきました。「字が大事やもんで、戻ってから習いに行きましたよ。すぐ使い物になるわけじゃなく、趣味と違いますで必死でしたね」と、独学で学んだ書体もあるようです。また昔は各家に家紋入りの提灯を備え、初節句や客の見送りなど何かにつけて提灯の出番がありました。家紋には複雑な図柄もあり、岩田さんが自作する型紙の種類も増えてきました。「注文が多くなるのは遷宮のときです。御木曳やおとしもち御白石持で各団それぞれに提灯があり、

大きい団は奉曳する車も大きい。そうなるど飾る提灯が2段になったりね」。

工房にあったセピア色のアルバムを見せてもらいました。提灯が多彩に町を飾っていた昭和の輝きを知る貴重な資料です。昭和5(1930)年の「神都博覧会」には数千個の注文に対応し、従業員も30人ほどいたようです。選挙事務所前にも提灯が飾られています。「規程のサイズは直径45センチ、長さ85センチだったのですが、それだと不格好ですもんで、少し小さく作っていましたね」と、岩田さんのこだわりが感じられます。

提灯は日本人の暮らしになくてはならないものでした。飲食店の看板になる赤い提灯には情緒が漂います。「使うところも減ってきてますけどね、雰囲気がいいでしょ」と、にこやかに語る岩田さん。温かみのある提灯は、伝統的な日本建築によく似合います。

お問い合わせ

「岩田提灯店」

TEL 0596-281-3041

※印の写真は取材先から提供していただきました

優しい肌触りと先人の努力を日用品の品々に託して

市木木綿

【御浜町下市木】



経糸と緯糸の組み合わせにより柄は幾通りにも。

七里御浜沿いののどかな集落にある工場で、ベルト式のモーターによって動く織織りが、カッシャン、カッシャンと音を響かせます。これは経糸に緯糸を打ち込む箴が左右に飛ぶ音。リズムカルな織音を鳴らし続け、懐かしい手触り

の「市木木綿」が生み出されています。今では唯一の織元となった向井浩高さんが、自動織機に不具合がないかを見て回ります。100年の時を経た機械の部品は手に入りやすく、修理も自身の手で。要のベルトが軋み出すと微妙な



向井 浩高さん

調節を施します。「調子よく動いてくれるといいのですが、機械を直して1日つぶれることもあります」と向井さん。機械といえども織る速度は手織りの4倍程度。そのため手作業に近い柔らかな風合いが残り、丈夫で通気性のよい木綿ができあがります。

向井さんは熊野市木本町にある「向井ふとん店」の3代目。店舗には「市木木綿」の布団をはじめ、名刺入れやブックカバー、ペットボトルホルダーなど、使い勝手のよいアイテムが並んでいます。赤や青、黄色とカラフルな縞柄も特徴で、うたた寝用の小ぶりの布団は、粋な模様がフローリングの家にもぴったりです。

七里御浜沿いののどかな集落にある工場で、ベルト式のモーターによって動く織織りが、カッシャン、カッシャンと音を響かせます。これは経糸に緯糸を打ち込む箴が左右に飛ぶ音。リズムカルな織音を鳴らし続け、懐かしい手触り

出たことが織元となつたいきさつです。

みかん畑が広がる御浜町で、海岸近くに山が迫る市木地区は、昔から高潮の被害に悩まされ、田畑の耕作に向かない寒村そのものでした。明治時代中頃に、村人たちに仕事を与えたいと大久保万太郎という人物が大和地方から機械織りの技術を取り入れ、藍の栽培を始めます。村の生き残りをかけ、何度も実験を重ねて、ご当地木綿が誕生しました。

もんぺなどの作業着として人気を集め、大和や吉野へも出荷。最盛期には村の人が携わる産業に成長しましたが、第二次世界大戦で力織機が供出され、戦



洒落た縞模様の枕や座布団



かつて行商に使われていた行李



経糸、緯糸のボビンに巻く機械



柄に合わせて経糸のボビンを並べる。



鮮やかな色使いがアクセント

後古い機械を購入して数軒が再開するも、高度経済成長などの影響で木綿の需要が減少します。大正時代に36軒あった工場は、昭和末期にはたったの2軒。そのうちの1軒が大畑織物工場でした。

「天気によって箴の滑り具合は違うし、勘みたいなどころがあります」と気温や湿度に気を揉みながら、向井さんが織りはじめて十数年が経ちました。「市木木綿」は、撚りをかけない単糸を使うため、「かせ」と呼ぶ輪にした状態で糸を染めますが、手間の掛かる「かせ染め」をする所が全国的に少なく、染色を頼んでいた工場が廃業となって焦ったこともあり

ます。肌になじむ「市木木綿」は単糸で

なければならぬと、染めを引き受けてくれる工房をようやく京都で見付けました。

工程に耐えられるよう、単糸を糊付けしてから作業をしますが、洗うほどに滑らかな肌触りとなり「もんぺにはこれが一番」とはき続ける地元の人もあります。「明治のころからやってきた人らに恥じんよう、仕事せなあかんね」。のどかな御浜の集落で、唯一の織元はおごることなく、ひたすらに「市木木綿」の歴史を重ねています。

お問い合わせ

「向井ふとん店」(日・月曜日定休)
TEL 0597-18512432

火縄

【名張市上小波田】
かみおぼた



削った真竹の皮を、一定の太さでより合わせる。

主人公・明智光秀が魅了された火縄銃に、名張市の「上小波田火縄保存会」の「火縄」が使われました。

田園風景の広がる上小波田地区では、寛文11(1671)年から「火縄」作りが始まりました。江戸時代、集中豪雨により池が決壊した上小波田に、伊賀国を治める藤堂藩が「火縄」を作って収入を得るよう奨励したと文献に記されているのです。そうやって藤堂藩の保護下で生産され、水路を防衛する鉄砲隊のために100丁分の「火縄」が発注されたことも伝わっています。

「上小波田火縄保存会」は京都の八坂神社へ年越し行事の「をけら詣り」に合わせて、毎年「火縄」を奉納しています。「多い時には7600本を納め



京都の八坂神社へ奉納。保存会は2018年に結成された。※

その用途として、明治以降は神社の行事や花火用として需要がありました。映画やテレビの撮影で、火縄銃を空砲で発射することがありますが、そういった舞台演出としての使い道も存在し、NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」では、

時代劇には戦のための武器がさまざまな登場しますが、中でも戦国時代を描いたものに火縄銃を目にすることがあります。銃を発砲するため、火薬に引火させる道具が火縄です。一定の時間継続して火を安全に携帯し、江戸期までは



岩寄 義孝さん

たこともあり、参拝者は灯籠の火を「火縄」に移して持ち帰り、正月の

煮炊き物の種火にし、残った縄は台所に飾って火伏せのお守りにしているようです」と同会会長の岩寄義孝さん。

火縄は木綿から作るものが多いのですが、上小波田では薄く削った真竹から作られていて、10センチで1時間も火持ちするほど品質が高いもの。竹製の火縄には油分が含まれていて、水をかけない限り火が消えることはありません。

明治初期には、農閑期の副業として地区のほとんどの農家が「火縄」作りに従事していたそうですが、後継者不足で半減し、平成28(2016)年には、最後の職人と言われた岩寄さんの親類一人だけとなってしまいました。復活の転機になったのが、その年に行われた「隠街道市」。名張市からの依頼で「火縄」作りを実演すると、その技術に来場者から大



熟練の技術で竹を削る。
写真提供：名張市



使い込まれた道具類



燃焼時間の長い真竹の火縄

よう乾燥させてから保管します。保存会ができて以降、新たな注文も増え、名張市新田の美波多神社では「火縄」を使った新しいお守りの頒布も始まりました。



美波多神社の「火除守」

寒い時期に行う火縄作りは根気のいる作業です。「後継者不足の問題はありますが、地域の伝統産業をどうにか継承していきたい」と、道具のナタを手入れする岩寄さん。歴史と技術を次の世代に受け継いでいます。

お問い合わせ

「上小波田火縄保存会」
TEL 05995-6513132

屋奉松明の鴨神社 鴨神社 氏子総代会

大安町丹生川上に鎮座する鴨神社では、長さ4.5メートルもの「松明」の炎が鳥居を焦がす迫力満点の神事が行われます。天下の奇祭とも称される「屋奉松明」神事で、いなべ市の無形民俗文化財に指定されています。現在は3年に1度、10月に行われますが、昨年は中止となりました。「鴨神社 氏子総代会」10名と自治会長4名で構成する執行部は、本年の斎行に向けて着々と準備を進めています。



梅山 兵治さん(左側)と
樋口 平和さん

お問い合わせ

「鴨神社」
いなべ市大安町丹生川上429
TEL 0594-78-0461
TEL 090-3467-0806
(樋口 平和さん)

今回は鴨神社にお邪魔して、宮司の梅山 兵治さんと「鴨神社 氏子総代会」氏子総代責任役員の樋口 平和さんにお話を伺いました。お二人からは、昨年やむなく中止となった「屋奉松明」神事を、今年こそはという想いが伝わりました。

まず、鴨神社と神事の歴史・由来について教えてください。

梅山：鴨神社は、天平19(747)年に書かれた「天安寺伽藍縁起並流記資財帳」に記述があるため、この時には当地に鎮座していたことがわかります。神事は、神社創建時に、京都上賀茂神社から御神体と御神宝(神刀、弓、矢)を迎えた際に、松明に火をたいた様子を表したものだ

と伝わります。その後、400年前ごろに現在の形式になりました。

——とても由緒があるんですね。ところで松明といえば、木や竹の棒の先に布を巻き付けたものが一般的ですが…

樋口：「屋奉松明」の松明は2種類あり、どちらも主に使うのは、菜種油用に栽培したナタネを収穫後に乾燥させたナタネ殻です。このナタネ殻をフジ蔓でまとめた松明を「屋奉」と呼びます。長さは2メートルほどです。そして、ナタネ殻を常緑樹の枝葉で包んだ後、簾状に編んだ42本の竹で巻き付け、フジ蔓で締めたものを「松明」と呼びます。長さ4.5メートル、重さ900キログラムといわれています。なお、これまでは野火・夜

火とも書きましたが、江戸時代後期に書かれた「伊勢輯雑記」にも「屋奉松明」の記述があり、氏子の各屋(家)から奉納するのだから「屋奉」としました。

——材料作り方も独特ですね。先ほど焦げ跡が残る鳥居を拝見しましたが、神事当日は、あの鳥居が炎に包まれるわけですね。樋口：そうです。鴨神社の鳥居は焦げ

ていないといけません。当日は、朝から例祭が斎行され、「浦安の舞」も行われます。午後6時に仕丁と呼ばれる人が、御神宝を保管する家へ赴き「神宝渡御の請願」をします。つまり、例祭に必要な宝物を貸してくださいとお願いののです。仕丁が出発すると、境内では「屋奉」に火を点けて氏子たちが振り回

す「屋奉振り」が行われます。これには露払い、邪気払いなどの意味があります。一方、仕丁は7回も赴きますが、行くたびに断られます。8回目には宮司、氏子総代と区長などが全員で出かけるため、ようやく神宝を保管する家からも出発して途中で合流するので、これを「七度半の使い」と称します。

梅山：御神宝が到着した後、寝かせた状態の「松明」に点火します。「松明」は2つあって、境内中央の土俵上で押ししたり、持ち上げたりしますが、これを蒸しあう」といいます。1つの「松明」を40人で立てたり倒したりして鳥居の下まで運



焦げ跡が残る鴨神社の鳥居



いなべ総合学園美術部・書道部の生徒たちが描いた絵や文字に彩られた提灯館収納庫



「屋奉振り」の様子 ※



「神宝渡御の行列」 ※



夜空をも焦がす勢いの「松明」の炎 ※

び、炎が鳥居を焦がすほどになったら、いったん土俵に戻し、再び鳥居の下へと動く動作を3回繰り返すと、「松明」の大きさは半分程度になります。それでも炎の勢いはすさまじいですよ。樋口：2つの「松明」は、実は雌雄を表現しています。2つを重ねあわせて終了しますが、最後に25歳の厄年の青年4人により「鳥追い」「飛角力」が行われます。

——お話を聞いていて、ただで熱気が伝わりますが、準備が大変そうですね。

樋口：「松明」は例祭の1週間ほど前に、雌雄それぞれ10数人で組み立てます。これはこれで重労働ですが、大変なのは

材料調達です。今はナタネを栽培する農家はなく、自治会が「屋奉松明」のために輪番で栽培しています。竹や常緑樹の枝葉、フジ蔓などの確保と刈り取り作業なども大変です。実は、以前は毎年行っていました。3年に1度になったのは、材料調達の問題も大きく関係しているのです。

——ありがとうございます。「屋奉松明」神事が、氏子総代会はじめ関係者の皆さんの尽力によって続けられていることが理解できました。なお、神事が本年行われる場合は、10月16日(土)の予定です。

インタビュアー：中村真由美

※印の写真は取材先から提供していただきました



みえを歩こう

緑滴る小径から絶景の展望台へ

伊勢市

ロマンの森伊勢三郷山

さんごうやま

今回のコースは、伊勢市の「ロマンの森伊勢三郷山」です。宮川沿いのバス停をスタートし、山頂近くの展望台まで上り、中腹の道を周遊して戻ります。

三郷山は標高142.3メートルという小さな山ですが、ゆたかな緑の間を歩く小径は歩きやすく整備され、起伏に富んだ複雑な地形を活かしていくつかの休憩ポイントが造られています。また、山頂近くの展望台から見る風景は、伊勢のまちを眼下に、伊勢湾を越えて知多半島や伊良湖岬にまでおよぶ大パノラマ。昭和61(1986)年に林野庁などが選定した「森林浴の森日本100選」にも選ばれ、市民の憩いの森となっています。

緑陰を抜ける風の中、多彩な植物が織りなす近景と、時折広がる遠景を楽しみながら歩きます。

取材・文：堀口裕世

宮川の畔からスタート

バス停「大倉うぐいす台」は、外宮前の賑わいを離れてすぐの宮川右岸にあります。バス停から、伊勢南島線(県道22号)を宮川の土手を左に見ながら少し進むと万所橋東の信号に。ここを右折すると、前方に三郷山の緑が見えます。緩やかな坂道を登っていくと、左手に「ロマンの森伊勢三郷山登り口」の看板がいよいよ山に入ります。

しばらくは幅の広い舗装路で、15台分の駐車場があります。ここを過ぎると



登り口の看板



水道タンク越しの遠景



「つどいの広場」



「三郷山記念碑」

伊勢市浦口町の町有林

道は右へのヘアピンカーブ。カーブの途中にある車止めからは歩行者だけの道となります。左に右にと大きく曲がる坂道が上がっていくと、4つめのカーブ付近に2基の巨大な水道タンクがあります。振り返ると、宮川の両側に田園地帯が広がり、遙か向こうに度会の山並が続いているのが見えます。

しばらく坂を登ると「つどいの広場」という最初の休憩ポイントに出ます。ここには「ロマンの森」の案内図と、「三



■ 行程図 所要時間／約2時間40分 ※所要時間は、おおよその目安です。

START	バス停「大倉うぐいす台」	約400m	「ロマンの森 伊勢三郷山 登り口」看板	約650m	「つどいの広場」	約240m	「いこいの広場」	約330m		
	約1.7Km	「若人の広場」	約50m	「学校の森」	約220m	「子供の丘」	約1Km	「ふれあいの広場」	約500m	「こかげの広場」

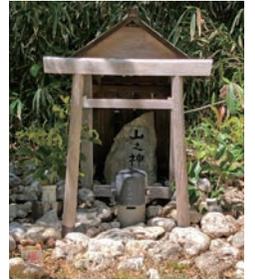
郷山記念碑」と彫られた石碑があり、石碑によるとこの場所は、江戸時代には「上三郷」と呼ばれる地域の所有で、明治時代に浦口町が買収し、荒廃や乱開発を避けるため環境保全整備事業の採択を受け、市民に開放されているそうです。伊勢市役所であったところ、県の事業として整備されたのが昭和54(1979)年で、現在も浦口町の町有林とのことでした。故郷の山を美しい自然のままに残したいという地元の人々の思いが重なって、この山が豊かな緑とともに残されているのです。



「いこいの広場」



「こかげの広場」



「山の神」の祠



「ふれあいの広場」の展望台



「方角石」



遙かに続く宮川側の眺望

案内図で散策ルートを頭に入れ、この森に込められた多くの人の思いを感じとったところで、再びコースへ。少し歩くと石段があり「いこいの広場」の看板が。石段の上は芝生の広場になっていて、東屋やお手洗いなども建てられています。

「いこいの広場」を過ぎてすぐに道は二つに分岐。右側の稜線を行く道がメインルートの舗装路で、左に向かうと「中腹散策コース」。往路はメインルー

抜群の眺望に歓声が―

少し進むと木陰に小さな祠が。鳥居越しに山の神に手を合わせさらに歩いて行くと、実の成る木がたくさん植えられた「野鳥の森」。小鳥の鳴き声もひときわ賑やかに聞こえます。また少し登ると「こかげの広場」。ここも東屋のある休憩ポイントで、この辺りから道幅が少し狭くなります。

遠く鈴鹿山脈や養老山地の山並も見えるでしょう。広々とささぎるものない光景に心が解放されるようです。「伊勢神宮奉納全国花火大会」の打ち上げ場所も近く、地元では撮影スポットとしても知られています。

めざせ「若人の広場」

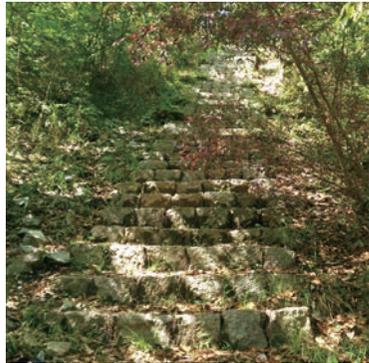
さらに先に進めば、逆方向の朝熊ヶ岳方面の風景が見える展望台があり、周遊するルートもあります。今回はここで引き返し、「子供の丘」「学校の森」「若人の広場」をめざします。「ふれあいの広場」から3分くらいの



「子供の丘」



「学校の森」



「いこいの広場」へ向かう「中腹散策コース」の石段

所に石段があり、これを下りると舗装のない「中腹散策コース」。尾根の道よりもさらに深い木々の中を進みます。かなり急な斜面の中を通る、くねくねと曲がった道なので注意が必要ですが、滴るような緑の中の小径はまさに癒やし。森林浴の効果抜群です。標識に従って進み、石段を上ると「子供の丘」。丘を下りて元の道に戻り、再び石段を上ると「学校の森」に出ます。ここにある藤棚やソテツなどの木々は、伊勢市内の小・中学校の子どもたちが植えたとのこと。「若人の広場」へは、そこからさらに石段を上がります。下からは

真つすぐな石段が見えるのですが、上がってみると斜め右方向に上がる石段があり、踊り場を経てさらにもう一つ石段が続きます。三層になった石段を上り切って「若人の広場」にたどり着けば、脚力は若人だと証明された気分になれるでしょう。

季節を感じながらゆっくり

石段を下りて帰路。この後に待っているのが一番段数の多い石段です。段差が大きく、しかも長いので、ゆっくり休みながら上りましょう。上り切れば「いこいの広場」に出ます。後は坂を下り、スタート地点のバス停に戻ります。

紅葉の美しい木々を集めた「秋の森」、春先に咲く木を集めた「早春の森」と呼ばれるエリアもあり、草花も彩り豊かです。十分に時間をとって、風景も、植物や鳥の声なども楽しみながら歩くのがお勧めです。

問 伊勢市産業観光部農林水産課

TEL 0596-21-5648

三重 の シンボル

鳥羽市

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木

ヤマトタチバナ



市の花

ハマナデシコ

■ お問い合わせ ■

鳥羽市役所 総務課 行政係 TEL 0599-25-1112

*市・町名の50音順に紹介しています。

*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 「市木木綿」(御浜町)

百五銀行のホームページで、「すばらしき"みえ"」のバックナンバーをご覧ください。
<https://www.hyakugo.co.jp/mie/>